

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成21年度病虫害発生予報第7号(10月)について

このことについて、病虫害発生予報第7号を発表したので送付します。

予報第7号

**コナジラミ類・アザミウマ類の発生が増加しています。
初期防除を徹底しましょう！！”**

高温少雨傾向が続き、コナジラミ類、アザミウマ類等の微小害虫の発生が多い状況です。

施設野菜の栽培が始まりますが、これらの微小害虫に対しては、初期防除が重要です。

化学農薬に頼った防除法だけでは、防除効果を上げることは困難で、防虫ネットや紫外線カットフィルムの設置等により、施設内への侵入防止を図るとともに、ほ場内外の除草等環境の整備を行いましょ



トマト黄化葉巻病とタバココナジラミ成虫

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
大豆	吸実性カメムシ類	やや少	少	やや少
かんきつ	ミカンハダニ	やや少	並	並
かき	炭疽病	少	少	少
果樹共通	カメムシ類	少	少	少
イチゴ	炭疽病 ハダニ類	やや少 やや少	やや少 並	並 並
野菜共通	コナジラミ類 ミナミキイロアザミウマ	多 やや多	多 やや多	やや多 やや多

注：果樹共通カメムシの平年比は、後期発生年の前7か年平均比

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の気温は高いでしょう。降水量は平年並で、日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週目は高く、2週目は高く、3～4週目は平年並か高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	30	60
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区気象台 平成21年9月25日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 大豆】

1 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（ - ）。

ミナミアオカメムシ

25株当たり成幼虫数 0.4頭

（平年 1.1頭、前年 2.6頭）

発生ほ場率 18.8%

（平年 19.0%、前年 38.1%）

3種吸実性カメムシ類（アカカメムシ、イモンカメムシ、ホソカメムシ）

25株当たり成幼虫数 0.1頭（平年 1.6頭、前年 0.6頭）

発生ほ場率 12.5%（平年 37.6%、前年 33.3%）

イ 県下3か所の予察灯における9月1～5半旬のミナミアオカメムシの合計誘殺虫数は、14頭（過去6か年平均63頭、前年142頭）で、過去6か年平均及び前年より少なかった（ - ）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高いとされている（ + ）。

(3) 防除上の注意

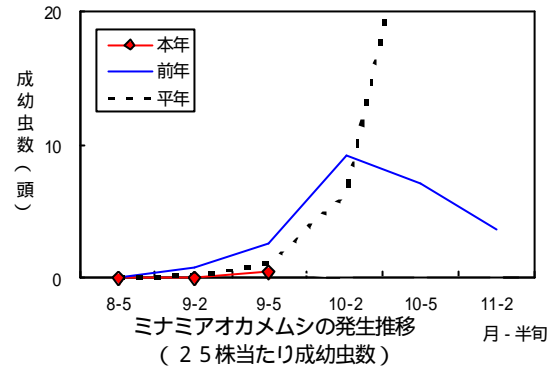
ア 吸実性カメムシ類の加害は収穫期まで続くので、必ずほ場での発生状況の把握に努め、発生が多い場合は防除を行う。

イ 薬剤散布を行う場合には、薬剤が着莢部によくかかるように丁寧に散布する。

なお、カメムシ類は広範囲に移動するので、広域一斉防除の効果が高い。

ウ 水稻収穫後、隣接した大豆ほ場への、ミナミアオカメムシの飛来が懸念されるので、大豆ほ場での発生状況に十分注意する。

エ ミナミアオカメムシに対しては、シラフルオフェン剤の防除効果が低いので、効果の高いジノテフラン剤又はクロチアニジン剤を使用する。



【果樹】

1 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（ - ）。

寄生葉率 3.7%（平年 6.2%、前年 8.8%）

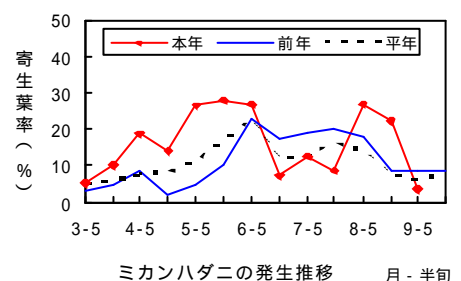
発生ほ場率 30.0%（平年 43.0%、前年 56.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（ + ）。

(3) 防除上の注意

ア 果実に寄生が認められる場合は、薬剤防除を実施する。

イ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 かき炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

発病果率 0.2% (平年 1.1%、前年 1.2%)

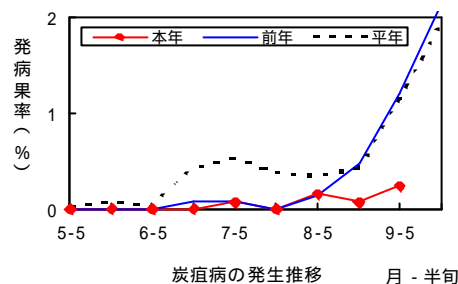
発生ほ場率 23.1% (平年 46.4%、前年 57.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源である罹病枝及び罹病果は除去・処分する。

イ 台風等の強風雨が予想される場合や、罹病枝の多い園では、薬剤防除を徹底する。



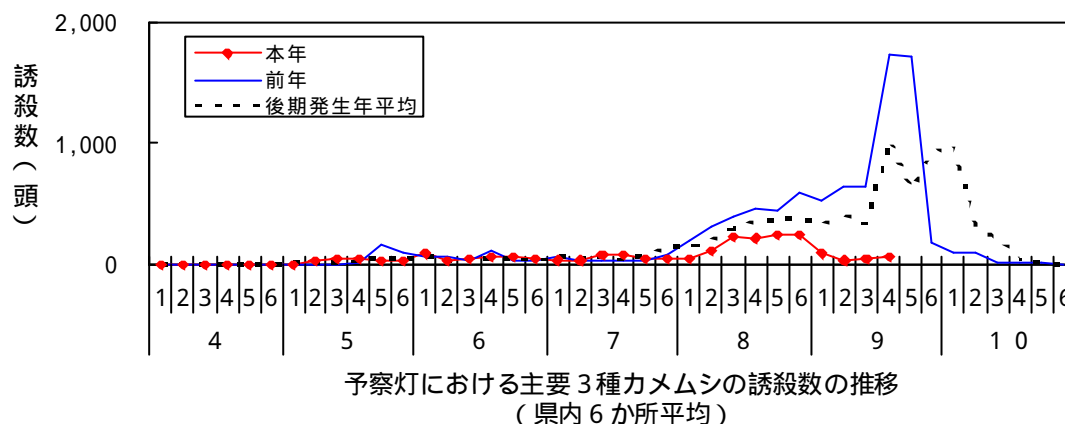
3 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：後期発生年の7か年平均より少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 県下6か所の予察灯における9月1～4半旬の主要3種カメムシの平均誘殺数は449頭(7か年平均2,106頭、前年3,554頭)と7か年平均及び前年より少なかった(-)。



イ 9月5半旬調査の結果、かき被害果の発生量は平年より少なかった(-)。

被害果率 0.2% (平年 2.6%、前年 2.9%)

発生ほ場率 7.7% (平年 53.9%、前年 64.3%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

カメムシ類は通常は夜行性であるが、夜温が低下する10月以降は、昼間も移動し果実を吸汁加害するので、昼間でも果樹園への飛来に注意する。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かき ガ ｺｶｶﾞ ﾚﾗﾝ	やや少	やや少	並	・発生が多い園地では薬剤防除を徹底する。

【野菜】

1 イチゴ炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病株率 0.0% (平年 0.6%、前年 0%)

発生ほ場率 4.8% (平年 11.4%、前年 0%)

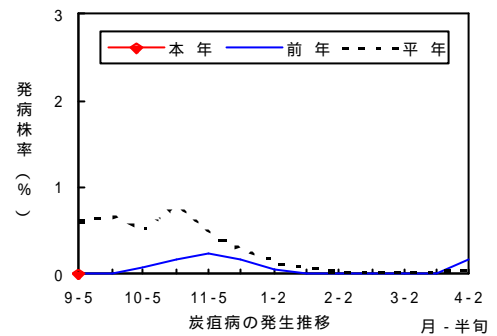
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病株は、残さを残さずに周囲の土ごと掘り取り、ほ場外で処分する。

イ ビニル被覆時期までは感染する可能性があるため、定期的に防除を行う。

ウ 하우스内の排水を図り、多湿にならないようにする。



2 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年並よりやや少なかった(-)。

寄生株率 1.8% (平年 3.4%、前年 1.7%)

発生ほ場率 28.6% (平年 26.4%、前年 17.4%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

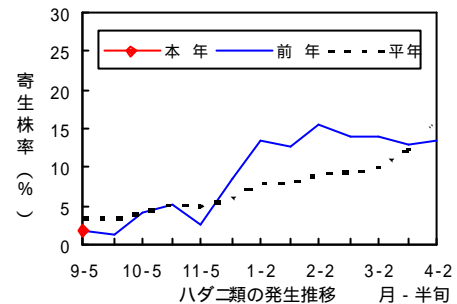
ア 多発後は防除が困難になるので、初期防除を徹底する。

イ 防除は、摘葉後に行うと効果的である。

ウ ほ場内と周辺の除草を徹底する。

また、摘葉と除草した雑草はハウス内に放置せず、ビニル袋に入れ密封し処分する。

エ ビニル被覆後に天敵を利用する場合は、天敵類への影響が長い有機リン系、カーバメイト系、合成ピレスロイド系、ピラゾール系の薬剤は使用しない。



3 コナジラミ類 (野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア トマト苗トラップにおける9月1半旬～5半旬の捕獲頭数は、平年より多かった(+)

筑後市 341頭 (過去6カ年平均 93.0頭、前年 233頭)

イ 9月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

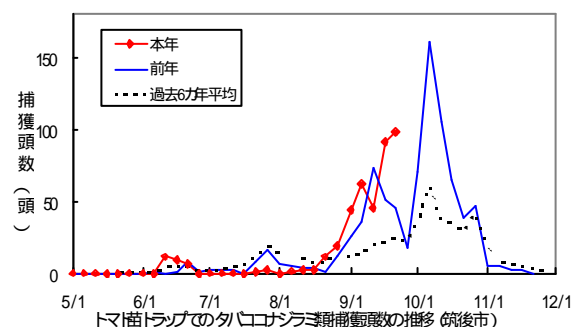
ナス寄生葉率 61.9%

(過去4カ年平均 26.4%、前年 18.7%)

ナス発生ほ場率 100%

(過去4カ年平均 92.9%、前年 57.1%)

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)



(3) 防除上の注意

- ア ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の生息場所や増殖源を絶つ。
- イ ハウスサイドや天窓等の施設開口部に、0.4mm目合いの防虫ネットを設置し侵入を防ぐ。
- ウ 幼虫や蛹が寄生している下位葉は、できる限り除去する。
- エ 葉裏や下位葉にも、薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- オ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

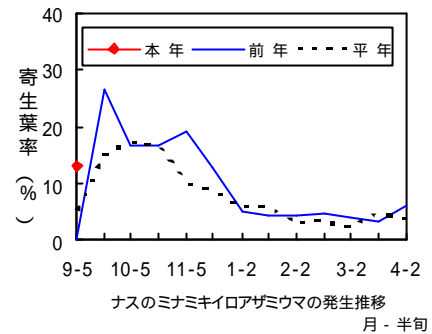
4 ミナミキイロアザミウマ(野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

- ア 9月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)
 ナス寄生葉率 13.0% (平年 5.2%、前年 0%)
 ナス発生ほ場率 71.4% (平年 44.0%、前年 0%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)



(3) 防除上の注意

- ア 多発後は防除が困難になるので、初期防除を徹底する。
- イ キュウリ黄化えそ病の媒介虫であるので、発生に特に注意する。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
アスパラガス 斑点性病害	並	並	並	・ 散布ムラができないように、丁寧に薬剤を散布する。
アザミウマ類	並	並	並	・ ほ場内外の除草を徹底し、本種の増殖源を絶つ。
イチゴ うどんこ病	並	並	並	・ ビニール被覆前後は発生が多くなるので、発生状況には十分注意し、防除を徹底する。
ナス うどんこ病	並	並	並	・ 整枝、剪定を行い、通風をよくする。
野菜共通 ハスモンヨトウ	やや少	やや少	やや少	・ 若齢幼虫は群生しており、かすり状の葉をみつけたら直ちに除去する。 ・ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。
オオタバコガ	やや少	やや少	やや少	・ 中齢以降の幼虫は未熟果や結球部位に食入するため、防除効果が著しく低下するので、薬剤防除は、孵化直後の幼虫をねらって行う。

農薬の適正使用・飛散防止対策の徹底を！

農作物毎に、全ての農薬に残留基準値が設定されており、基準値を超えた食品（農産物）の販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルをよく確認し、使用基準を遵守してください。品目の異なる畑作物の作付け機会が多くなる時期ですので、周辺作物に飛散影響防止（ドリフト）対策を講じて下さい。

また、散布時は農薬の被ばく防止のため、保護具を必ず着用して下さい。

農薬の使用後は、防除履歴を正確に記帳し、使い終えた農薬の空容器は、生活環境の保全や公衆衛生保全の点から適切に処分して下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数など、ラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を、十分に洗浄する。

2 飛散影響防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量を正確に記帳する。

4 保護具の着用

農薬の散布前には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

5 空容器の処分

空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは法令で禁止されています。

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpjn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpjn.ne.jp